昆虫少年は、博物館で育ち合う

中学生の楽園をめざして

わが国では、子どもの遊びとしての虫とりが、もはや文化として定着しています。これはすばらしいことですが、「虫とり＝子ども」と見なされがちで、中学生ともなれば虫とりを「卒業」するのが通念です。しかし、虫好きの道をあきらめきれない子が、少ないながら存在します。このような中学生らが安心して自己研鑽し、育ち合う場の創設をめざし、2001 年度、「ユース昆虫研究室」を開講しました。

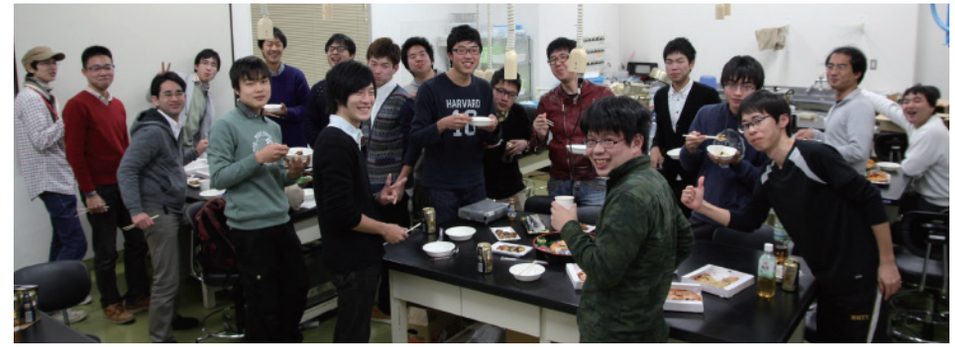
ユース昆虫研究室の一場面

ユース昆虫研究室の対象は中学生のみとし、定員は 15 名。年間を通して毎月開催し、春から秋までは野外での観察調査を、冬期は標本の整理や展示の制作を行います。夜通しの調査や、夏休みに行う3泊4日の「強化合宿」も、恒例となっています。ほとんど何の制約もない濃厚な時間を仲間と共有し、学び合うことで、幼かった少年少女たちも、フィールドワークの達人として、逞しく成長していきます。

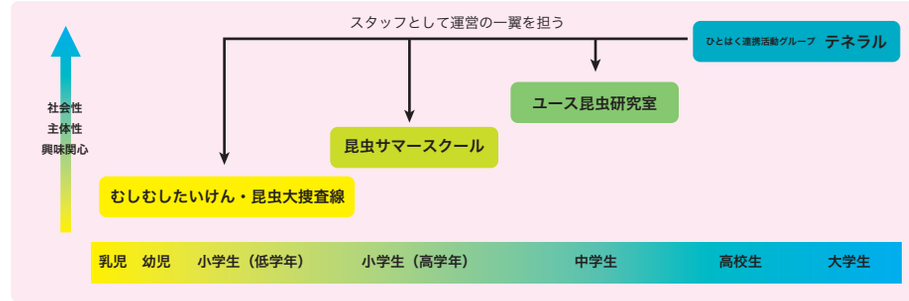
高校生以上は、スタッフとして

ユース昆虫研究室を経た高校生は、本人の希望により、ひとはく連携活動グループ「テネラル」に属し、スタッフとしての活動に入ります。意欲的に活動する高校生や大学生の姿は、子どもたちのロールモデルであり、保護者には安心感をもたらします。彼ら彼女ら自身にとっても、子どもたちやその保護者とのコミュニケーション機会や、サービス提供者としての自覚は、貴重な経験となるはずです。

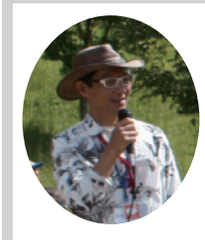
「テネラル」のメンバーが増えることで、小学生や幼児を対象としたプログラムも拡充でき、学びの機会は厚みを増してきました。虫を愛し、人と自然を愛する若い世代がすくすくと育ってくれるよう、引き続き努力を続けたいと思います。



ひとはく連携活動グループ テネラル 会合のようす
全国に散らばる進路多様なメンバーが集まれば、虫の話だけでなく、進学・就職・その他人生に関するもろもろの情報が飛び交います。



昆虫をテーマとした、幼・小・中・高・大 連続的な学びの場
制度教育ではない、自由な学びの機会が、博物館には、あります。



昆虫を介したコミュニケーションの創出プロジェクト
代表者：八木　剛
協力者：ひとはく連携活動グループ テネラル
財源：受益者負担